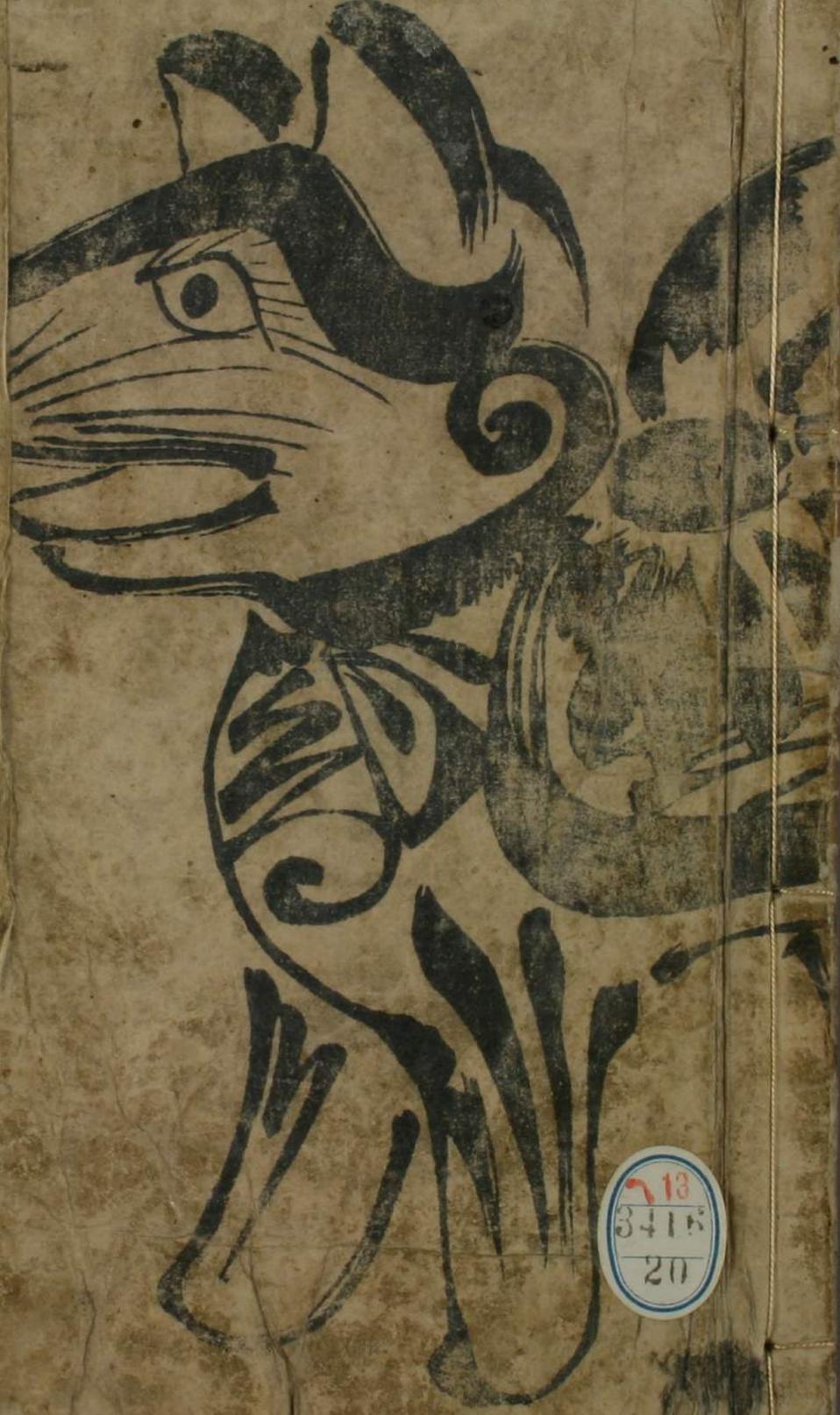


里見八犬傳

第五輯

卷一





曲亭主人著 本輯全六册  
柳川重信画 山青堂梓  
溪齋英泉画 自卅九回至卅回

# 八犬傳第五輯

虎鶴黃  
耳書位  
不然



の板

## 八犬傳第五輯序

徳川幕府

徳川幕府

余常以謂有<sub>下</sub>遊<sub>フ</sub>乎世者有<sub>上</sub>為<sub>ル</sub>世<sub>ニ</sub>所<sub>レ</sub>遊<sub>ハ</sub>者遊<sub>上</sub>乎世者適<sub>ニ</sub>於<sub>テ</sub>自<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>適<sub>ク</sub>不<sub>レ</sub>適<sub>ニ</sub>於<sub>テ</sub>人<sub>ニ</sub>所<sub>レ</sub>適<sub>ク</sub>是以樂在<sub>レ</sub>内<sub>ニ</sub>無<sub>レ</sub>竭<sub>ル</sub>也為<sub>ル</sub>世<sub>ニ</sub>所<sub>レ</sub>遊<sub>ハ</sub>者適<sub>ニ</sub>於<sub>テ</sub>人<sub>ニ</sub>所<sub>レ</sub>適<sub>ク</sub>不<sub>レ</sub>知<sub>ラ</sub>自<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>適<sub>ク</sub>是以微<sub>ニ</sub>其樂<sub>ラ</sub>於<sub>テ</sub>外<sub>ニ</sub>以自<sub>レ</sub>苦<sub>ム</sub>焉若<sub>キ</sub>狂<sub>ニ</sub>接<sub>カ</sub>輿<sub>ニ</sub>遊<sub>ハ</sub>于

歌詠莊周遊于寓言左思司馬相如  
遊于文場杜甫李白遊于詩詞羅貫  
笠翁遊于傳奇小說雖所遊不同而  
其樂一致亦惡踏人之足跡哉蓋鸞  
鳳不羣飛葛藤不獨立葛藤也者吾  
欲拂之鸞鳳也者不可得而為友雖

然人世一夢中其所遊非華胥必南  
柯寤寐在我何遠之有能知是樂而  
後遊者心之欲與不欲無往不樂遊  
乎遊乎余固也久矣今茲端月本編  
脫藁暨刷人告成即是言為序

文政五年陽月上澣 篔簹漁隱



南總野見八犬傳第五輯目錄

第三十九回

歛二箱良儔 葬夫妻  
浮一葉壯士送西友

第四十回

詰密莖暴風挑妙真  
起雲霧神靈奪小兒

右題目第四輯呀錄今改之本輯右增減因重出

貳卷

第四十一回

木下闇妙真訝依人  
神宮渡信乃遭措平

第四十二回

撥夾剪犬田決進退  
誣額藏奸黨逞殘毒

三卷

第四十三回

射羣小豪傑開法場  
涉義士俠輔投河水

第四十四回

雷電社頭四雋會語  
白井郊外孤忠窺讐

第四十五回

賣弄名刀道節復怨  
追喪窮寇助友換敵

四卷

第四十六回

地藏堂莊助爭首級  
山脚村音音拒舊夫

卷

第四十七回

莊助三試道節  
雙玉交還其主

八二傳五輯卷一

山青堂藏



初竿乃  
直死哉  
あけ  
まろ  
かく  
まろ

玄同共昇

小厮依从

暴風舵九郎

八代目五郎巻一

山青堂藏



丁田町進  
海  
射  
まろ  
まろ  
まろ

張り  
あけ  
まろ  
ん  
ん  
頼鳥齋

神宮借平

八代目五郎巻一

山青堂藏

馬は背に成りては  
 去りて 馬は雨  
 婦もや驛路のす  
 〰〰〰〰〰〰

閑札

松島屋隠居



曳手

十條力二郎

一六五五五五五五

五〇山青堂藏

旅ゆく君もあは  
 おもむを叶まは  
 あり毛 閑齋

單節



十條尺八郎

一六五五五五五五



八十八年五月...

六

山崎堂...

五

第四十八回

馱馬暗導兩夫妻  
兄弟悲全二老親

第四十九回

陰鬼陽人肇判然  
節義貞操迭苦諫

六卷

第五十回

白頭情人遂合ふ鬚  
青年孀婦入り菩提

是書每輯五本為一帙以刊行唯第四輯  
四本為一帙是故今於本輯增一本以補  
其不足自是之後亦當如第三輯已上

八犬傳第五輯目錄畢卅八回已上題目見前輯卷端

南總里見八犬傳第五輯卷之一

東都 曲亭主人編輯

第三十九回

二箱は飲めて良儔夫妻を葬る  
一葉を浮せ壯士兩友を送る

文明十年戊戌の夏六月廿二日の朝未明は犬塚犬飼の兩義士、大照文  
小と俱は犬田小文吾を自送り、門の戸を引、蓋く舊の席を團坐し、  
あつた骸を隠さんとして泣沈むる妙真を、つらなくも案内して辛く納戸  
より求むる兩箇の葛籠は山林夫婦の骸を精悍しく飲め、その表を延べ  
包みて船荷のとく造る程は、大法師と照文入江橋のほとり、  
舳艫を竊は背戸川へ漕よる、霧あければ人あらしむ、又彼孟六鹹四郎、  
三個の悪棍の亡骸は信乃と現八と背戸の河原へ打ちつけし、腰は鏝の石を

附く水底あつく沈るよ、大へこれの中も回向して頓生菩提と念はれた人み  
 有繫は不便はあはれよく共念佛をうらむとくはる程よ必釋送もあ  
 整ひふ天の舟暗うしく進退既便宜をゆる入江橋の舟うふ成兵絶て  
 那誘ふこの隙を其勢領き謀合ひ出船の纜とくくと急せ妙真  
 大八の親兵衛を抱たつ。葛菴は添めく船は乗る信乃現八も乗りて  
 板子の下は伏しそり當下蛭崎照文ハ簑笠は姿を窺へて竊し船を  
 漕出せバ、大八もとり笛りく霎時河原は目送るよ迷よ其処とも見えん  
 方は是義士節婦を皇天憐れむひん雷のひみく立竈く咫尺の間心  
 定りぬね彼帆大夫が遠見の兵舟退くをありとくもいそぐこれを急せ  
 船路は障りなくく海上遙は走る程は竊收りく日ハ出たり。されバとわれ  
 照文ハ楫より迷ふべくもわらぬ素より安房人ありけれバ水とくくと陸より易う

市川の郷をそとく吾侪の家ハ彼処ぞと妙真が指をさすく船ハ門  
 邊は著しけるを釋の便宜は是のそとく大江屋の篙工們ハあつく遠く船を  
 出しく昨夕より一人も在らぬ宙守史耳のの疎くて只炊とほる婆々のとわれハ  
 信乃現ハ後やれく照文とも河岸は登り妙真と先は立平とて柩ハ  
 代る両箇の葛菴をそとく母屋は運び入れて家廟の舟より扛居る客  
 あつても慰めりく齊一嘆息をうらむ。あつても妙真ハ心ざぬわしくあはれ  
 子子の義烈は羞らけけん復らさくは面色せば奥の一室の塵を拂之  
 信乃と現ハこの処は潜りて照文も茶を勧め膳を薦め知とく養志の可嘆  
 又暇ある折々あつては家廟は對ひて香を焼けた花を齊脱て子と息婦の  
 後世を吊ふ看經の外他もあつく忘れんとは生憎よその面影の目よとく  
 いしよの胸よのそとくひびき禁めりて落る涙の玉匣ゆき親あつくあはれと

あるあつたは稚児の母と慕はれ大人しく或は外に出立は立く獨遊は餘念あり  
 鳩の車は竹馬は走り疲れ假寐の裙は衣添ふのもかた睡顔と云れば親は肖て  
 遅くは生育も今茲も未だ逢ふ土用央ふるとは秋の風より悲しく残る  
 老の身はもとどろりたる抱抱揚れば夢欲現く懐へるとさし入れて夢を  
 乳房を探るも哀れなりかゝるとの曠昏は小文吾、大いりつれ立て行徳  
 あり来より妙真をゆくこれと云くいとと奥へ案内を信乃現八照文  
 ホハ歡ひく對面し彼條の首尾を咨く文五兵衛が安危を問ふ小文吾を  
 密しく曩の某路と急ぎく莊官檀内許赴は雷深ればも雨ぬ諸  
 折戸を敲き大塚信乃が首捕く来れと報へ且して召入れは新織  
 帆大夫奥よりぞくみくまの趣を問糾まは狐疑の用心大くか檀内を  
 側は坐り夥兵はあつ十手と把りく左右間ち捕巻りその某のひるす。

豫く仰を稟るごとく僕きのみの黄昏は宿所は走り還りくれば果して一個の  
 旅客を何れそ武士の身の中は刀瘡をのあつと起居は聊不便ありく  
 彼は死賜と骨相圖を披きくこれ被竊は合はれば年紀より面影より被  
 けり衣の色もその模様些も違ふをかれが替者は撈りくその人かび  
 まのいが現疑なくもわぬ信乃と云んは極まりと云はれはより氣を暗く  
 酒食を薦め更蘭臥房は潜ありく只下刀は刺殺して首捕てゆかり交り廣き  
 僕がゆきのみまは見も知らぬり大塚信乃の親文五兵衛が織り  
 かねる舎藏べくもあつたをわん答は胡論ありは夏は熟る老人の僻耳をい  
 あれ此度の恩賞は親の縲紲を免せせめとゆは彼首級と取ゆく包や  
 終はさし寄されは莊官檀内受より実檢を備へる當下新織帆大夫ハ  
 包は衣と云んが又も披きく首級を又骨相圖は合はる。

忽地横子を破と拍く感をもと半响許満面は笑を合ふ某を招き近子  
 小文吾微妙に働かしめ分るるわぬ信乃が首級を進りしれ文五兵衛ハ  
 科を免して汝と共に宿所は還さんれも亦速く去るし速に許我をかへて  
 夏の趣を覚えあげは怠慢の罪をゆるぐと人走りと成兵を退せよ  
 餘のうら云云と案し檀内はあちをぬきせぬ程は露霽を見分平  
 う六帆大夫は促装して首桶を携夥兵をゆく遠くかへり去りぬる父は免れを  
 相伴く入江に還るる彼権謀をもどあねが身の縛の釋をうと歡ぶ氣色の  
 わく却まうみ良あり宵中さそと推量れども路次はあれが告ふ小由那にて  
 宿所はかへり著る大道徳は迎られみ子舎は圓居し身かりの事の趣  
 房ハ義烈沼蒲が枉死及某血の奇特あり大塚生の雅倉平愈大ハの  
 親兵衛が玉の瘧の念玉觀得而修験の本名本心送りかむ父報六ハ大

道徳も人々を船に乗し露を犯し市川へ遣りしゆのゆと告めは父はうと  
 流れてゆく水のうらぬをうと有繫は花の心弱く今ゆり伎子立かこ  
 流れは汝ハ道徳は俱してと市川へ赴けし妙真どの力を勦ね房八沼蒲が  
 野邊送りハ今宵をあらんぞん葬り果かば汝ハ彼両友を潜りし船小  
 乗し大塚まで送りしれ共侶を愛ども婢兒們ハのあさ死すや  
 彼ホハ之り来るとも親子齊一とくも苗守の程を心より申し且懇に彼極を  
 えバ又哀を増んの家廟は櫓を折添く看經しとわんを老人中を  
 相忘ししめ汝ハあづと閑地とくしとをぐる親の意は仕り彼此  
 血は深き物大く洗ひ流し道徳は俱しく来れしとくとの緊略を報ふ  
 けれバ人々感嘆せざるも就中信乃現ハ文五兵衛が無異を祝して小文吾を

勞苦の大々々々言葉の末も山林夫婦が死を惜むるを深かり  
 且して妙真の涕らわけて小膝を進め喃犬田ぬかか子の子の志竟空  
 かかへて輒く追捕の人々を欺たぬれば亡魂のまを歎くあひはらんか高工  
 小もみか存らる現大人のいれしと葬の今宵中かひやく影護るべしと  
 又ハ小文吾點頭く己もまをわかれ犬塚生の急難の一具ハ釋れぬあま  
 許我へ遠くもあはる房八沼蘭が死しるを且く人あはるるを四鄰の人のり  
 問ハ沼蘭ハ聊故あま行徳へ遣しる房八所要ありと鎌倉へ赴たると  
 答ぬんてあはれ月も終なりとこの宵蘭を究竟ある支中の頃如此くと  
 いひ合ひ時刻をまはる大法師ハ七骸と歎き葛菴のわたり退りて潜る  
 夢を問をひある枕念仏も夢の世や彼邯鄲のあられは母があつて焚き立の  
 飯も逆縁の涙を鍋に落し味噌味え伏え花開を縁ハ薄き実を汁きを

更阿弥陀佛弥陀仏々々々念をれが初夜過ぎく寺の鐘も無常を示  
 流轉の巷煩悩の狗の声より更にあま生死の海近れば彼岸より波の音  
 返りて呼吸の祖徠の人の迹絶く既時刻ありふあめく支度と  
 房八沼蘭が七骸と歎ゆる両箇の葛菴ハ小文吾と現ハ背負くは彼  
 盤を携へて天ハ親兵衛ハこの時よも熟睡せし信乃が横がら抱た墓所  
 供立んとて照文ハ豫て準備せし單張燈を引提く先を進むハ大則導師  
 両箇の葛菴の間は立けを既りて背門口より送りてを要時とも苗難妙真ハ  
 燒捨山の燒ゆるをとり送るく只ひとり端居を携へ柴垣の袖は涙のたまはら  
 珠教の唱名の声も曇る宵箇の天斑雜る星影も定めぬ世の哀別離苦堪ぬ  
 炎暑の六月も今宵むらりハ肌寒た風ハ本来空水火滅んとく又光に螢秋  
 とぞあふ張燈のんをばあつて翹ちの伸あがり目送りたりと程人々を



大江親泰繪

後崎照文

天田小文五

大塚信乃



朝露碎  
王家傑  
送らぬ

大法師

大岡現八

阡陌を邁くこ百歩許西へ入ると一町ありて陝小の岡ありけりこの外昔より大江屋の  
 墓所ありて小文吾の墓ありて云云といひありて葛菴を却てみれば現八  
 也とて却てな葛菴の上は附りて秋盤を兩人のみよみお把て房八が親真兵衛が  
 墓の側を壊と掘起せし七八尺も穿果より當下信乃ハ推見を石の上  
 居措て両箇の葛菴と搦あはせし小文吾現ハ諸をけりて空は縹あつて  
 夫婦を合葬はる程は大法師ハ空のほろ近く合掌して引道守の語句を唱てとて  
 諦聽諦聽四大本來空奚分別泡沫與夢幻妻子猶波  
 器況珍寶乎疇能隨汝者儻不破壞一團心識亦焉知  
 寂滅之為至樂頌曰荷葉與花共浸影漸瀝涼風蕭颯  
 急催秋其氣清冽其色慘淡涅槃室中物僉休息吁得  
 時哉吁得時哉即投與以下火最後之句子作麼生看

破熱池中並頭蓮分明紅爐上一點雪喝

唱了て退くと死小文吾と現ハ再び秋盤をとり揚て立地は埋りしれ信乃ハ  
 とい大死の石をとり来て推せし左右の梅の核を伏せ阿伽を沃き茶菓を  
 挿て大ハの親兵衛を第一番に推向て頭を叩き額つせ次は小文吾次ハ  
 信乃次は現ハ次は照文次第は焼香回向せりこの時ハも推見ハ全く睡の覺は  
 けんを訝しげに左見右見る細小なるをうわ合して廻らぬ舌は念仏の南無と  
 なるを彌陀頼む人おの所作を痛おれこれをもん彼をありて人々嘆息せり  
 中ハ叔あるはなわがれバ又推見を携て食犬江屋へ入り来り背門より入ると  
 程は後方遙に撞りて鯨音ハ四更なり妙真をかく出迎へて人々を芳び盆は  
 茶碗を並居て準備の煎茶を薦て小文吾ハ墓所のう埋葬の為体と云て  
 妙真これぞうあまき子ハこて媳婦をば彼瀬にたたく義の為に

共命を預る世の雋傑達を柩を送りしや仰んや況祖父松平の王なり  
 師ありと云えざる金碗大人の子よあり道徳を引導せられ五山の衆徒を全  
 聚して經誦せしむる優へく千萬人の道俗を推の繩を曳きしあり渠が為面目  
 あり亦只これのありしや尚付く孤獨孫をひ捨られれば何ぞう歎き仰んやと  
 のひつゝ又う歎く袖は黄縁の推見せしむる臥房は伴へば萌葱の燭の七布八布  
 廣野も今ハ化野の中は捨る撫子の軀を睡るも哀れしかる又妙真ハ舊日の処を望  
 才の政遣火焼く管待ハ小文吾これを見たりて大家よ甲夜中ひひつてくあり  
 許我へ遠くもあぬ斯らも揃を坐ん危し其曉乎く犬塚犬飼両友と形を  
 大塚へ送るこのよハ父中も豫くありせぬさうありあも商量決着をされば  
 心急地のせしむる妙真も寄るも各残しと惜れ切く初七日の比巻心  
 苗も居く及もも筋われを念ひ申す夜ハ深き明果るを後す

相譚更と慰れ信乃ハ現ハ共侶ハ妙真も對ひ此度某ホゆる今  
 息賢母も稟る恩義ハ今さら演盡さるべから後難を憚り本意を  
 故郷へ赴けどもこれ故ある伯母夫許再びこの身と寓難し只同盟の一犬士大川  
 莊助一字を額藏と呼ぶこのよ潜る對面く人々の人を告ぐこの餘の  
 所要も果さる外亦他さるやかれハ所不定の身一旦袂を分つと  
 あも実生の犬士あり鄰郷ハ犬田父子ありゆれば疎遠をくもあは嫡孫の  
 為自愛しく哀戚あり傷れんことを再會の時を心緒を盡せば  
 と告る別は妙真ハ心通けし志を要時頭を擧ぐりる當下蜃崎照文  
 懐より準備の沙金を五包とり先三包を扇に乗るも信乃現ハ小文吾  
 ホがほり近く寄る三犬士の金ハ三十兩を下包と有り尤些少の東西あれども  
 此度の路費を資するのよ私に餞別ハ里見殿の賜あり辭を納めんと

〇三入のこれぞまゝに。〇其の過世あるに同盟のまゝ今もな  
 〇徴を志するやと。〇今又何の功あり。〇この賜を受らんや。〇且大塚へ道の程  
 〇十里は足らぬ旅の。〇親の纏骨八要を推辞。〇照文頭をち掉り。〇あつた  
 〇本意は違へ。〇同盟の義より。〇且徴を志せ。〇因と果を推せ。〇各代  
 〇人のお子の死の。〇あつた功あり。〇俵を賞。〇傳かんや。〇且豊鳴の  
 〇大塚の宮戸の大河を隔る。〇道の程遠く。〇大塚生。〇伯母夫の宿所。〇あつた  
 〇入らど。〇纏骨。〇七專要。〇其も亦旅。〇あれ。〇豊中。〇貯祿の多。〇ぬと  
 〇憾の。〇物受られ。〇安房。〇還り。〇君。〇報せ。〇辞。〇あつた  
 〇納め。〇頼。〇勸め。〇己。〇信。〇乃。〇現。〇小文。〇吾。〇ハ。〇その。〇理。〇は。〇感。〇服。〇三。〇入  
 〇存。〇一。〇恩。〇と。〇謝。〇と。〇や。〇る。〇な。〇受。〇納。〇め。〇一。〇包。〇の。〇沙。〇金。〇と。〇角。〇よ。〇ち。〇来。〇七。〇妙。〇真。〇と  
 〇招。〇き。〇近。〇千。〇老。〇母。〇よ。〇あ。〇房。〇八。〇夫。〇婦。〇が。〇追。〇薦。〇の。〇香。〇華。〇の。〇料。〇よ。〇手。〇親。〇兵。〇衛。〇は。〇賜。〇り。〇の。〇ん

〇辞讓。〇八。〇要。〇を。〇た。〇り。〇り。〇や。〇と。〇の。〇は。〇是。〇推。〇辞。〇ゆ。〇感。〇涙。〇坐。〇禁。〇め。〇ひ。〇く。〇受  
 〇一。〇犬。〇士。〇壯。〇助。〇と。〇や。〇ん。〇届。〇け。〇ぬ。〇某。〇大。〇八。〇の。〇親。〇兵。〇衛。〇と。〇伴。〇や。〇安。〇房。〇へ。〇あ。〇り。〇て。〇後。〇又  
 〇大。〇塚。〇は。〇赴。〇起。〇各。〇位。〇と。〇再。〇會。〇せ。〇ん。〇と。〇の。〇を。〇傳。〇へ。〇と。〇い。〇ん。〇信。〇乃。〇ハ。〇感。〇謝。〇を。〇  
 〇遠。〇る。〇限。〇を。〇賜。〇を。〇推。〇辞。〇せ。〇六。〇失。〇敬。〇の。〇ん。〇致。〇あ。〇れ。〇也。〇彼。〇額。〇藏。〇の。〇莊。〇助。〇ハ。〇の。〇馬。〇は  
 〇缺。〇ら。〇る。〇や。〇ぐ。〇の。〇を。〇た。〇冥。〇加。〇餘。〇も。〇り。〇別。〇の。〇賜。〇を。〇と。〇某。〇ホ。〇は。〇あ。〇り。〇と。〇彼。〇友。〇分。〇與。〇  
 〇と。〇今。〇を。〇あ。〇ひ。〇ひ。〇た。〇の。〇義。〇を。〇り。〇ハ。〇許。〇を。〇せ。〇と。〇い。〇の。〇扇。〇を。〇推。〇向。〇く。〇返。〇ん。〇と。〇と。〇と。〇  
 〇大。〇ハ。〇急。〇は。〇推。〇禁。〇め。〇と。〇又。〇益。〇を。〇口。〇誼。〇を。〇俺。〇們。〇の。〇と。〇彼。〇人。〇ハ。〇一。〇面。〇藏。〇を。〇成。〇を。〇と。〇大。〇士。〇の  
 〇一。〇人。〇と。〇ん。〇六。〇の。〇賜。〇を。〇漏。〇ら。〇る。〇と。〇是。〇則。〇十。〇一。〇郎。〇が。〇私。〇の。〇計。〇を。〇成。〇を。〇貪。〇道。〇を。〇示。〇合。〇一。〇  
 〇賢。〇を。〇招。〇た。〇を。〇徵。〇を。〇君。〇命。〇は。〇あ。〇の。〇の。〇れ。〇が。〇聊。〇辭。〇を。〇添。〇を。〇と。〇今。〇あ。〇と。〇共。〇信。〇を。〇受  
 〇山。〇林。〇夫。〇婦。〇の。〇為。〇初。〇七。〇日。〇の。〇回。〇向。〇せ。〇と。〇他。〇郷。〇は。〇赴。〇る。〇出。〇家。〇の。〇所。〇行。〇は。〇違。〇を。〇と。〇と。〇

且杖を駐るの速く候へて再会せんとの依り納めどもと懸よと云ふ信乃  
 小のり感佩して遂まとの意は仕りしこれ彼の問答は夏の夜は短く明を  
 鐘の聲は信乃現八八退却し行装を整へて辞別しと云ふ小文音も亦  
 別を告ぐ速く身を起しを妙真急よ呼ぶべく準備の割毫を遞与妙小文音  
 これを受くる其ハ大塚までこの両支を送り届けし彼犬川莊助も對面を  
 かりがればをめぐり兩三日遅くとも四五日の程ハ必りなりと云ふ  
 留め又妙徳へも憚りし父も翌の早ハ市川へ邁んといれれども相憚り  
 等閑なりて款待せしと妙真領なくと云ふ妙真領なくと云ふ妙真領なく  
 とも房ハ沼蘭も初七日の遠夜の比や妙なりと云ふ妙真領なくと云ふ妙真領なく  
 共信水際立てて目送る信乃現八八再會を契りし妙真領なくと云ふ妙真領なく

閃りし乗る棹りの推しを黎明の潮合は漕れくく舟の  
 迹をたぐく世の中は別とて北鹿の角の束の間も惜る脆た人のそり  
 あり却説この日亭平の比は文五共衛ハ行徳より来たり妙真を云くこれとて  
 おもくて来りしれつざわろくと真成は上座をもちて送は涙吐て要時  
 何事もいひおぼあるトハそが背向より頻り涙をうらめバ客も裾  
 なく腰ある角を技せし推しし胸のわろくとわろくとあましく目と紛れ  
 ども紛れぬりの愛惜の歎たの霧の離れ憂を隠せぬもかたどやうやく  
 歎えしけん文五共衛ハ畳む角を側し措く喃阿懐よ向上下る房ハが  
 孝あり義あり潔然今般の送言曲はせりさるり義を竭すはとも  
 世を隔る怨を執念深今と何と云ふべきかかかかかかかかかかかか  
 ちりちりなりやうと云ふ憑しと云ふんを人の追薦を沼蘭の大分

久安げ胸の痛ふは諄々あつたのゆゑと見小文吾ハ彼面友を送りて江戸へ  
 迎たらん又二一の賓客達ハ奥中をとりて子舎を吹と向ハ妙真涙を収て  
 現宣のひびく子どりのあはれもいひても多ひ絶間あはれめと又口説立泣を  
 冥土の碍りとわん犬田との今朝未明は船を被二を大塚をまゝ送りて  
 遅くとあはれ四五日か還んといれりかれば後安うそし大道徳と蛭崎河ハ  
 子舎まゝとつれ誘ふといひ子と身を起さんとほ程大八の親兵衛ハ外面  
 より走りまゝ祖母を物と携て駈推をまゝ其慢行徳ある外祖  
 父の事もせし礼あはれを願つともと文五兵衛ハも終は引を膝まゝち  
 乗し大八和郎ハまゝ要時ぬ間まゝとやう大人あつたりやう物取と搦探  
 せを袂裏の花黄葉田舎糕と袋の俵と遠与を受く戴たる伶俐めど抱抱  
 婦の頬を合つ頭を拊つ愛あつた忽地は多ひあつたりと抗し単衣の腋開あり

牡丹は似る疾を只顧感嘆あつた妙真ハ孫が腰著る獲身囊の匂  
 解後と彼仁の字の玉とも携つて示はれん文五兵衛ハ遠く懐紙の間より  
 眼鏡を取つてつりつと感と己現玉といひ疾といひ字に灼然  
 既よから奇特われが孫が久後とく憑し努夫ハあつたりと玉を護身囊よ  
 納り腰に著るさつと又文五兵衛ハ妙真と先よ平く子舎を迎たらん大  
 照文は對面して送る意を演情を説く閑談をさく肅々あつたり大八昨夕三  
 犬士と竊山林夫婦が柩を岡へ送りて埋葬し為体及犬田大江の勇男ハ  
 犬塚大飼ハ等しく里見家ハ過世ある緯の趣をと示せ照文ハ亦未  
 意を告ぐ賢を招た士を徴め君命を述傳つた又いふかれば此度某ハ四大  
 士を相伴く安房へ還るといひたりは彼犬川莊助とあつたり犬士今ハ武藏の大塚ハ  
 われハ同盟全うはれん犬塚大飼犬田ハ且く徴は忘せられも里見殿の家臣と見

前諾ハ違々々然バと云々空と帰國と云云と云々  
 奇特の小見とこの市中中育と安房の藩中の人と  
 可兒謙退辞讓も更も又と云々の後足下と兼引バ妙真也推辞と云今  
 と急ぐらぬぬと安心の為告るの事トバ亦大法師も共侶も辭を盡して  
 物教ぬ孫さ大諸侯は微もあつた幸よとゆれ孫大の親兵衛  
 丈夫と云々四犬先も何と微志死に勿論の事ゆれ渠ハも東西  
 進むあつた又唯推辞もも心ゆく退くは無慾のため進退ハ某と云

ついでハせん妙真が点頭バとも仕らんとも渠ハ二親を喪やと云々の  
 日子を程を後七歳未滿とも些の慎むらん初七日を迎ふ比ハ小文吾も  
 又これ彼と商量と云々も首は後と云々大塚生の厄難の既や釋され世ハ  
 憚の関も云々又行徳へ来ぬと云々素人宿ハ町寧かれと云  
 宿の四五日を送る程は房八沼蒲が初七日は初めも小文吾ハ大塚より  
 相伴と行徳へ去りゆれと云々大と照文と或ハ二日或三日送代は市川と杉徳ハ  
 宿の四五日を送る程は房八沼蒲が初七日は初めも小文吾ハ大塚より  
 経の照文も正首は俱は席まつと云々の初風も立ち外の夏越の幣も流れて河岸は

文五兵衛も妙真も心もれり。大照文も相憐なり。時七月端の二日。大  
きもの行徳あり。朝と起る文五兵衛の。思惟。大照文は  
之の事。故ある。信乃は定る。吉。伯母も伯母夫も甥をせり。と  
謀らば。彼村雨の刀を奪り。賺して。許我へ遣ふ。わ。あれりの嫌疑。あれが。と  
信乃。故郷へ。赴。伯母夫許身を寓。云云。との親族。も。憑。かぬ。彼を  
亦。犬塚。久恋の地。あ。只。その友と。眞實。の。婦。人。の。人。を。報。を。あ。ひ。  
の。ま。ん。は。送。り。ぬ。ゆ。小文吾。も。け。は。ま。も。か。へ。ぬ。其。処。は。不。測。の。事。あ。る。彼。を。せ。押。せ。  
を。ん。あり。貧道。彼地。は。赴。ん。や。犬塚。犬飼。ホ。が。旅。宿。を。何。処。と。あ。が。は。も。犬塚。の。庄。官。  
墓。六。が。小。廝。の。額。藏。の。莊。助。を。竊。訪。立。地。の。の。消。息。を。ぬ。て。後。に。ぬ。れ。の。あ。  
あ。く。も。房。八。夫婦。の。初。七。を。果。さ。ば。犬塚。は。赴。け。彼。犬。川。莊。助。は。潛。り。は。對。面。し。て。さ。  
年來。の。行。脚。の。趣。意。を。告。ぐ。里。見。殿。の。家。臣。と。死。契。約。を。せ。ん。と。あ。り。今。あ。り。

邁る。翌の夜。小文吾。を。ぬ。り。必。く。人。頭。を。病。者。と。り。の。文。五。兵。衛。然。り。且。く  
刑。談。は。程。は。折。し。市。川。が。延。壽。崎。照。文。来。る。が。船。小。間。室。は。迎。入。れ。て。大。法。師。共。侶。  
件。の。趣。を。告。ぐ。あ。ん。照。文。も。亦。然。り。法。師。彼。地。は。赴。け。ぬ。あ。り。便。宜。か。某。の  
今朝。も。す。ま。り。も。と。も。を。相。憐。人。為。り。親。兵。衛。が。二。親。の。初。七。も。も。果。さ。ば。  
あ。ま。り。か。く。あ。ん。の。あ。り。安。房。へ。候。ま。り。を。折。り。妙。真。も。死。勧。や。ば。渠。も。さ。り。  
や。く。兼。引。く。物。は。小。文。吾。の。ま。も。と。の。一。條。の。事。整。を。さ。る。を。法。師。秋。暮。の  
厭。は。彼。地。へ。邁。ん。と。り。つ。よ。日。の。鬱。胸。を。針。く。は。足。れ。り。然。る。べ。し。と。只。管  
稱。賛。あ。り。あ。ん。か。く。文。五。兵。衛。ハ。外。は。ゆ。り。便。船。を。求。る。は。未。の。比。は。出。船。あり。あり。と  
大。照。文。は。酒。食。を。羞。り。て。款。待。を。程。を。あ。り。の。時。刻。は。あり。り。大。ハ。行。装。を  
整。く。遠。く。の。あ。ん。が。文。五。兵。衛。も。後。は。跟。先。は。立。く。入。江。の。船。場。を。送。り。つ。  
あ。ん。の。波。も。か。へ。り。日。を。翌。と。契。り。て。袂。を。さ。り。ぬ。か。り。て。照。文。ハ。あ。り。の。の。趣。を



木魚の音も時程も絶間なく積り功徳高き山の石も打たれると未の比飲  
 横目影背門の槐も秋蟬の音も暑き声も暑き声も浩処は秋高く阿懐久し値  
 かり呼びて背門より来るあり妙真誰と心も木魚も遣り珠数を收め  
 男を起さん程もあわねさう縁頼る實戸は會釋もあつてをわけて走り  
 礮と推開くと驚かすもえられも人此年の齡五十ありやうん眼圓鼻大  
 頬骨高く唇厚く板齒一枚脱ぎと臘石とり補うり皮膚赤黒あつて  
 秋茄子の如く鬚鬚半白く老冬瓜に似たり黄庚木綿の単衣は肩と腰と  
 汗深く申の時よりあり積鼻禪の花よりこれなりと顯しく片  
 端打せし裾も下さば四空柱は身を倚り己が隨ひ高胡床近辺の團扇を  
 手抱白とり揚ぐ衣領を推披き暑しくとう扇げば戦く胸毛の熊か  
 似く花繡文月輪欵傘と書し瘦肩は掛るを拭左ひは獲て腮の下にお

流る汗を頤擗げく拭ひる。是土地は名も暴風の船九郎といれ  
 宿も定ぬ彼此は身を備へく船を漕げも酒と賭博の耽り鴻許の癖者  
 荷を罷糶減まのふあぬ風吹あり。八房はう腹をく大く罵り懲りて  
 介後ハ寄つけざり。今ゆりて事なれが妙真ハあつてと之もゆぬ  
 面色しく背門より奥まで進くと呼門あつて誰か人と訝り。居起  
 中んと寒れども此も羞びの鬱悒あるが錢がなれが洒落せく濱邊の貝子  
 劣れども風吹れもあつて波は接れ寄るもあつて。日果計の双原が  
 媚を誑告するもあつての哥々罵られ安否も問はれり。かつてあれ  
 かつてあれ奮然刺染と今ゆり。





奸を  
 呈す  
 能く  
 妙に  
 落す  
 九郎  
 真と  
 智を

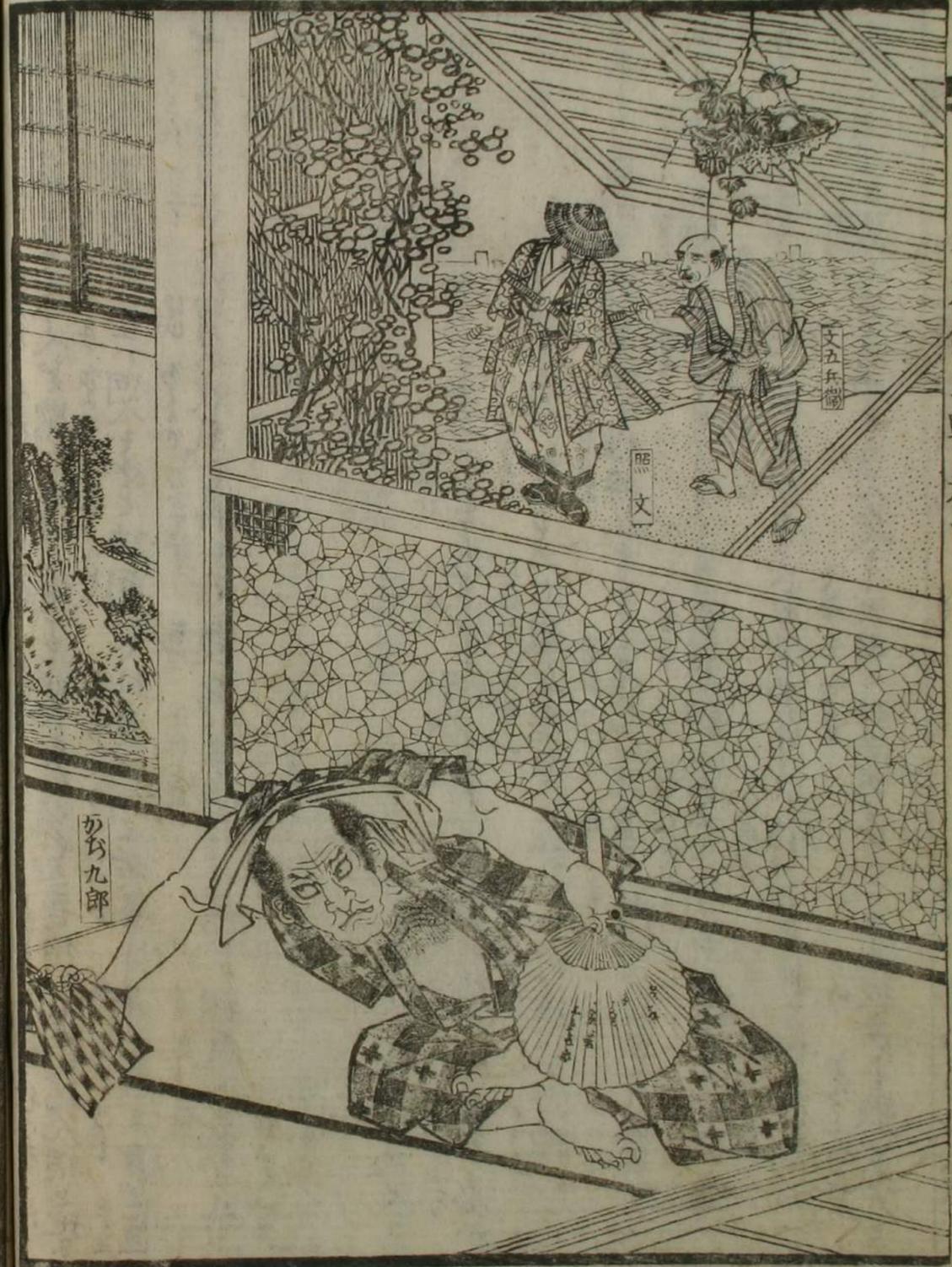
八尋五郎卷一



妙真

十八

○山青堂藏



文五郎

昭文

九郎





縁頼の實戸打倒しと遙く度中央へ筋斗をくわき疼し痛しと倒る羅漢  
 杉を携りゆくや多く身と起し七も敵をくもあふれ恨げはるるく鉛刀武士奴  
 偶怪我の功名で汝が巻法の捷し中夜に投られしを二見よ  
 勝も損利ねれども啖へと裳を褰く尻推向うの敵けは照文怒てあざ懲むや  
 女ありと侮りる狼藉はゆゆ其をうて密夫と罵り何れも再そび尾陋の  
 雑言今へし許しごと其処を退たそと敦圍く刀を兎と引技け如真吐嗟と  
 推禁めく渠は名を悪棍あふ傷けかむおつが人鄙悟よんを児子捧打  
 敵もあふ死めあはれ逃か脱れぬと棟られ照文ハ齒を切り疾視する  
 船九郎ハさも一をとうのんく呵々と冷笑ひ刀を技之威し人も殺せ身も殺さる  
 有繫よ命ハ惜りるを砍らぬ刺せやゆわどその鉛刀り骨のむ暴風あハ  
 砍らぬかん砍らぬハ暇をおうさんと猶襟よ袴よ擬廣言あはれは粘衣の土とち

拂ひて櫓の草履を取て足とあ罵りあつて逃去る當下照文ハ刀を収めて縁  
 頼あり背門のくをえんは彼悪棍ハ影もた影も隙もあつて僅におおぬ  
 又舊の席はかり著く程は次の間立在て件の為体と閃窺る文五兵衛ハ進ん  
 照文と共に妙真ハ事の本末と告げられ妙真ハ倒れる實戸と遠く推立てさ  
 船九郎が狼藉の渠が邪猜の條いれらる云と憎む小報もあふん兩人齊一  
 驚き合ひ又禍のあらは起す諸君もつわを顔を聚りて俱に思ひを疑  
 照文ハ後悔の巻を捺りて嗟嘆するの趣を知らば彼悪棍を數面て禍の  
 根を断へるし小既ハ彼奴を走りしは且も躊躇あつて又いつか故と  
 船九郎ハ告げしを彼岡の新墓を被るるありと山林に亡骸を首の首  
 信乃が體といひてあれは夫婦合葬ありし其の妻の亡骸ハ陳はる  
 これありゆく穿鑿せられ彼身うけのうらま露頭を死骸料とてあはれ

及び大田父子も大江の老母のゆかりを脱ぎ死ねども船九郎と走りたが  
 油断大敵悔し泣きををりたる後れらるる追蒐之數果はり外は術中を  
 つかひて取り取く文と信を文五兵衛推禁りて宣の趣理りて送恨誰し  
 かれども今ゆく道をも及ぶるは且船九郎この里は定ゆる宿所中一  
 只同悪相聚入無頼賭博の友の多かりを愚按ふゆども壁は千尋の堤の  
 水一擲の壞をりて壇たさし熱は今追結ぬ毛を吹く疵と求る再度の  
 後悔ありやせん。這奴の這奴が随ゆきも未然の禍を避る術とあり  
 ぬれ早ゆに要ありや。かきぬと煉りぬれ照文は僅は怒を飲り  
 且て文五兵衛の妙真とんりて。南阿懐兄弟何とあひあせ  
 小文吾が武蔵へ赴けり。既十日はあひも渠はさうかり道徳も  
 三四日歴ても返りぬるは蟹崎河は妨れりも相譚くも。あつて  
 慰るよほほむあり居つぬと云えり市川へ赴けり。又妙真と商  
 量見誘ふと

つれ立ち途のそごも事くも又も搦め加え胸を不慮の  
 のそよたたりもものり脱ぎ死ねども同は妙真嘆息して善  
 業の報ひあり道理の豫るやあづる義も節婦もかた後を  
 枉津日の加の廣縁も幸かた人も幸かた人も。過世の業報  
 ありんも形か死身の形か死世のありて道心死すも吾侪  
 八経に。毎失の罪は沈むも稚児孫も恙ありんとす。六年  
 来の心づくも甲斐ありん。女子はあつて浅きもねむり  
 ぬれ決りぬるは先ある涙は。いともひひりく又もあ  
 歎きを照文練り樂み禍既は蕭牆あり起ると知つ。持守  
 長食後は無益かかれが。大と小文吾をある侯人の甚危し  
 某ハ大八の親兵衛を携へ速に安房へ還り。祖母も孫も  
 傳添ゆく且この地と速離らば彼船九郎が。毒氣を避る  
 此れ究竟の便点か。ゆきとこの処とたれ去りて封疆を  
 退る悪黨。あれ莊官あれ數百人の追蒐もも怕え死すや  
 あり。吉那屋の主人宿所は



ついでとて笠あう傾けく間道より進む程は落日暉ととて野禽飛べと急こ  
 袂は笛の風八昼の秋暑は似てふあは急ぐとをれは足弱の動もれば後きと  
 待つては又走る市川の町を離れて田舎路を土總のくえ並松原を走るれば  
 処々延繁る茅萱の下は集く虫の音をうきより暮初く日没はあはなりき  
 浩処は前面より下叢叢松蔭より頭れゆる一個の癖者頭はふ拭の糾鉢巻  
 して腰は一口の短刀を跨右は八九尺の長權を挟みて柳色條の筒腹被の丹藏  
 煩ゆる諸肩祖る單衣の西袖と前は締く毛膈陽著は衣の衿を片端  
 打せし躬割の打扮髪は皓く面は赤淫のく山嶽の暴らどく骨を太く  
 膚は黒斑めく周西の崇るは似く大道と陝と立塞ととをれば是別人か  
 怒れば船を覆し又屋をも倒せしと現暴風の名の船九郎あぞ有る  
 當下暴風船九郎は持る權を取直しく横えつ又推立く酒氣分るる

声高やうふをれ賊奴輩遅るる汝水既よ悪むの戲房をよれば覗まれ詰  
 られく後家共侶は逐電軟かくあそくと猜せく殿計の甲乙馳催して門のハ  
 狗を附おたの途は視法師を立置て夜行とけける路脈をこの海道と観着て  
 先へ輪く張る綱は宿栖迷ひの旅鳥捕へく絞るは隙費らば脱れくくと  
 観念く女を遮与しくと死の逃とをく追えんやと旬旬は嗚呷て疾視  
 うる照文これとぞあへん先度懲ぬ不敵の悪棍今蓄の根を断せハ地方は  
 愚ど何時うハ除ん刀を穢を惜たれども望は任しく先物見せんと敦圍猛く對ひ  
 進て刃を晃りと引技けハ船九郎ハ声や立く衆皆出せと呼はあぞあはゆる  
 左右あり高萱の中小松の蔭あり或ハ三人或ハ五人折權大魚刀を引提る  
 夥の悪黨簇々と冬蝨のごとく跳びくを照文亦を攬籠く撃つと競ひ蒐  
 とハ照文ハ些も擬淺せハ前後左右に引附く面やハ戦やうその間よ



だんごべゑあちあちあんべゑ。○  
文五兵衛ハ大ハの親兵衛を妙真抱く。○  
路を市川のへ退れぬ。○  
頭をかく吐と嘔ま敷んと競ふ。○  
妙真を背より立しと旅刀を打振々々且く防戦せり。○  
あはれは鬻刀をさく法は稱かく敵ハ三人。○  
物もせは依介ハ亦文五兵衛が失あんとを怕れく援んとああも身子寸鐵を  
帯がれば妙真が捨る杖をもち振立く進まり。○  
伏せく五人ハ深痕を負せしむ。○  
あはれ又船九郎は近つんと多もな不推隔られ進退自在とほごうる。○  
依介ハ文五兵衛と推並び且く敵を柱へし。○  
あり打込を敵の器械を接ぎく眉間を破と傷れる痛痕をば要時止治

堪ハ濃と漬る鮮血と。○  
あはれ老人の勇氣も腕も衰へん。○  
透と窺み船九郎ハ薄暗はく走り身を声をしりぞ妙真を親兵衛共侶  
楚と抱け吐嗟と叫ぶ身と悶くゆ解んとく角。○  
とわくは見方もく隻はみは釵子技とく船九郎が抱腕を骨も徹れと丁と  
刺く裏瀾くまよあはれども有繫疼痛堪ざり。○  
あはれ何ぞと身を戦く組方面を解く妙真ハ稚兒と肩を揺被逸足出  
逃んとしを脱し遣の尻跳菟りと大ハの親兵衛が肩尖を丁と刺り引く七枝の  
果を揺とく推放搔獲く左の脇を捉籠う妙真ハ稚兒と畧奪られし。○  
脱く路もあはれぬいを親兵衛をとりかまんと受ハ些もあはれ痛む。○  
めは怒もあはれ科もあはれむと死ん人あるものを返せ復せと叫び泣く。○

廿六 (一) 山崎宗信

閑東の俗小  
児を罵りて  
餓鬼といふ  
その食を求  
むるやむ時  
そのやむ時  
なり。

それバ妨とと湯倒く驟のく横路を下町あり走りあふ妙真を  
稍身と起してか不追兎と暮るを舵九郎ハ入るり朽樹の株尻うら  
ひく腕腋抱き推兒と弄玉のどく技揚く地上へ墮とち落せ息絶  
べく天叫ぶ声とよるの薄月夜妙真ハ轉つ轉つ喘と近づく程は舵九郎ハ  
稚兒と又引りて動せ尼奴且くこれとよ己があらは後いざこの餓鬼ハ  
今寂滅為樂又同行の三人ハ夥計の教輩は任用しれ二人も活てハ之を  
べつ固へ埋り死人の縁起も彼も此もあつて今一期を憑とわ六  
市川へ還りて今宵を二世の目を下免あつて餓鬼も下ハ措を阿乳母  
日傘で饅頭の皮を剥き栄曜の表盛否とやこの細鱗を内將ゆりて  
酒をまぬあちを決め心とせよ心をせよこの餓鬼とよ應の石を極  
令もく胸前打んと振揚れば妙真ハ吐嗟とるる目も眩らち消く叫ん

まろよ声のぞ禁んといふ腰と小草の上より身を投とて共死人と泣沈む  
かろ程は照文ハ廿餘名の悪黨を八方へ殺散して文五兵衛共侶は妙真が往  
方を索のく稍の処へ走のち打りて雲間を漏る月影は遙はれ妙真ハ  
道次は依りて舵九郎ハ推仰向る稚兒を左に押へ右に石を擲合の今や  
打んと揚り揚り兩人存一駭に怒るる等霎時と呼被つ僅は走り近づくも  
人保を取られ又のつれもせん走ら齒を切り巻を捺りて瞬も疾視する  
舵九郎も亦これと頭を拳口を閉ぢて轉ぐてく物笑ひ泣く兩人あて  
死む一歩も近づくこの石とて餓鬼奴と單擊尼奴ハ啼泣くよもつれ  
雲の天幕草木ハ葳棚か野曠地勾欄わく看官ハ栄カとぞあひふ  
あまのつれも七種を打挫ん欵礎を打て結果人欵望は任せんつれも  
飽もあてと弄べとも照文ハ文五兵衛も透あつて親兵衛を極ひんとあつて

八代傳王朝卷一

七

三



大江流

かき節

八傳五郎卷一

廿八  
山月堂



船九郎と  
屠戮しと  
あはれいりん  
神灵一犬  
士を隠も

依外

文五衛

照丈

妙真

八傳五郎卷一

山月堂

再び言葉をおぼろげに合さぬも神仏の感応冥助と黙禱し怒を忍び心を苦  
 しめ立並ぶ目成る間四五十歩は過るるも船九郎は既に斯海傲殘忍不敵の  
 奥子乗しく早更製は又呵々と冷笑ひ揃ひまろひり骨癱むも汝も兩人を死  
 後家奴も珠教を斬るかん。バ餓鬼奴を料理せん巻の牙をよくえよと  
 再び石をも揚と妙真ハ只身を抗くあれよくと哭叫ぶ声荒悲しく絶體  
 絶命照文も文五兵衛も今ハ忍びが忍れど小兒を驚ば答の大刀懸言のぞり  
 逃るは乾竹削りかえんほど刀の鞘をもとけり走り進んとは程船九郎  
 會する石を閃く推兒の胸を穿く撃んとは。あつたの巻狂り地よを  
 破と拍し且怪し且睜く塵粉はかれと復ゆり揚る腕心地麻痺てこれ中  
 おか憫然る頂の上は鬘鬘と一糸の靄雲天引降る電光凄しく風亦  
 颯と音し草の石を巻た沙を飛く草木を靡るを鳴動も或ハ明く或ハ暗く

雲ハ漸々降る大ハの親兵衛を引包むをえり。中へ登る  
 船九郎は復り驚た睜る両身を抗く推兒と遠くを跳ねる  
 撲地と轆べ足ハさうさあつて地をたれ雲の中は物あり倒し揚る  
 鮮血濃と雷り船九郎ハ屠り鳩尾の邊をぐをんと引裂れる  
 軀ハ挫と落しけり奇特は照文も文五兵衛も進る忙然る後方あり  
 嚮は逃る悪黨四五人。船棹をこり船棹稍藻川鎌をのく志  
 物を閃く不意は起る撃んと進むを照文をくえり大刀真額  
 抜鬚一縦横身礙り砍立れば文五兵衛も相並り再び刃をうち振りて兩人  
 奔一兩敵を瞬間は砍仆残る奴原舌を掉り刃を引く逃るを三及許  
 追捨て舊の処に立れば風を多雲霄く傾沈む五日の月の影のと出る送り

里見八犬傳第五輯卷之一終

